

2. 馬伝染性子宮炎 (CEM) の臨床と化学療法

宇野 駿 (日高軽種馬農協)

Clinical Observation and Chemotherapy of Contagious Equine Metritis

Takashi UNO (Hidaka Agricultural Cooperative Association of Light Horse)

1997年英国でCEMの発生報告があって以来、本病の我国への侵入が心配されたが、'80年5月馬産地北海道日高地方に発生が確認された。直ちに国、道、地方自治体、及各関係機関協力のもとに陽性馬の摘発に努め、発生時208頭、その後の検査で100頭、計308頭が摘発された。'81年は45頭、'82年29頭と逐次陽性馬は減少した。そこで今回これらの陽性馬の治療に当たった結果若干の知見を得たので報告する。

1. 臨床症状

陽性馬の臥床症状は、わけて有症状と無症状とに区別される。有症状の馬は交配後早くて1日目、遅くても7日目頃より大量の悪露を排泄し、その量は50ml~150mlに達する。悪露の色調は乳白色で粘稠性があり(おも湯状)遅く悪露を排泄するものの中に不潔色の混じた帯黄乳白色の悪露を排泄する。悪露の排泄期間は個体によって一定しないが、治療をしない場合でも3~4日後、平均5日後には大量の悪露は消失するが数日にわたって尾根部を汚すことが多い。又殆んど合併症として、陰炎、子宮頸管炎を発症しており、特に始めて交配した馬に著明である。陰粘膜の充血、腫瘍、湿潤が認められ、子宮頸管は浮腫を伴っている。一方直腸検査では子宮の腫大が触知されるものもあり、急性の場合は疼痛を呈することもある。

無症状馬で陽性と診断されるものも多数あり、菌体数によるかは不明であるが、中には未交配馬で3頭が陽性となっており、注意すべきであろう。全身症状は感染と思われた直後に若干の

熱発を認める馬も居たが、臨床的には正常と思われた馬が多い。

発情周期：陽性馬は正常な性周期を現わすことは少く、交配後12~14日目頃より悪露の排泄と共に微弱発情が来、その期間は2~3日間で終る。交配後17~18日目頃に来る馬は1~2日の短縮で終ることが多い。

2. 治療

治療方針：

発生時は諸外国からの報告例を参考に実施することが決定されたが、生産地として例年行っている子宮洗浄に薬剤(市販されているもの)注入が主体をなした。其の後全身療法が併用されたが、副作用があり、しかも悪露を排泄する雌馬の放牧地ならびに隔離厩舎の不足等もあって、再び前述の方法が広く行なわれるようになった。

全身療法として、PC系ならびにAMを、3~5日連続投与し、投与量はPCで600万/日AMで4g~6g/日投与した。副作用は筋注部の疼痛と、食欲不振が認められ、特に種雄馬に認められた。局所療法は、外陰部(陰核)洗浄、子宮洗浄、子宮内薬液注入、及び子宮洗浄後薬液注入などが行なわれた。外国の報告例にもあるように、無処置で放置することは生産地の状況からして困難であった。

使用薬剤：

消毒剤としては、クロロヘキシジン剤が主で約500倍にして使用した。子宮内注入薬としては、市販されている子宮内膜炎用の薬品にPC或はAMを混ぜ、数回注入する方法をとった。

全身療法も同様に PC 或は AM を筋注した。

結果:

上記薬剤の全身投与と子宮洗浄を併用した5頭中3頭が交配可能になり、そのうち2頭が受胎した。また子宮洗浄のみの7頭中6頭を交配し、5頭が受胎した。46頭の陽性馬中24頭が、シーズン中に交配し13頭が受胎した(58%)。残りの馬については交配時期がおそくなることで交配を中止したものと、再び症状が悪化したもの、細菌検査で陰性とならなかった馬である。

3. 繁殖成績

'80年に菌陽性馬の受胎率は47.6%と低く、これらの馬の'81年の受胎率も49.1%(家保調べ)と平均受胎率より25%~30%低率であった。このことは菌の感染をうけた馬が治療することによる子宮内細菌叢の変化がうかがわれた。すなわち *H. e.* が検出されなくなった時点で、*Pseudomonas* が大量に検出された例があった。或は、再感染に対する防衛力が低下したものと考えられた。

4. まとめ

臨床症状では、CEM 発生以前のいわゆる子宮内膜炎とは区別しにくく、特に'80年と'81年とを比較すると CEM の典型的な症状を呈する馬は少なくなって来ているため、異常に悪露が多いと云うだけで診断は出来ない。しかも無症状に経過する馬も多くなっているため、菌検査により摘発が最も有効な診断方法となってきた。*H. e.* は生存に適した環境にある陰核に長期にわたり存在しており、これらの菌を排除することは非常に困難である。妊娠馬で菌陽性馬は、分娩後の治療がすみやかに行なわれることが要求される。治療方法も子宮洗浄及び薬液注入が主流であり、感受性テストによる適正な抗生物質の使用が重要である。全身療法は副作用の方が懸念され、また効果も疑問があるようである。消毒剤による子宮洗浄も頑固な陽性馬には応用できるが、以後の受胎については明確でない。

文 献

- 1) 鎌田正信, (1979). 日獣会誌, 32, 487~494.
- 2) 鎌田, 秋山, 小田, (1980). 第90回日本獣医学会講演要旨, 119.
- 3) 菊地, 角田他, (1980). 同上 122.
- 4) 中島, 小田他, (1980). 同上 121.
- 5) 鎌田, 秋山他, (1982). 日獣会誌, 35, 90~96.
- 6) 鎌田, 秋山, 小田, (1982). 日獣会誌, 35, 163~169.
- 7) 鎌田, 秋山, 小田, (1981). 日獣会誌, 43, 565.
- 8) 菊地, 角田, 川上, (1982). 日獣会誌, 44, 107.
- 9) 中城, 成瀬, 杉本, (1981). 第92回, 日本獣医学会講演要旨, 143.
- 10) 小田, 他(1981). 生産地におけるシノボジウム.
- 11) 角田, 菊地, (1982). 家畜繁殖誌, 28, 216~220.
- 12) David, J. S. E. et al. (1977). *Vet. Rec.* 101, 189~190.
- 13) Platt, H. et al. (1977). *Vet. Rec.* 101, 20.
- 14) Timoney, P. J. et al. (1977). *Vet. Rec.* 101, 103.
- 15) Timoney, P. J. et al. (1978). *Vet. Rec.* 102, 63.
- 16) Taylor, C. E. Det al. (1978). *Eq. Vet. Rec.* 10, 136~144.
- 17) Swerczek, T. W. et al. (1979). *J. Repro. Fert.* 27, 361~365.
- 18) Kamada, M. et al. (1982). *Jpn. J. Vet. sci.*
- 19) Crowhurst, R. C. (1977). *Vet. Rec.* 100, 476.
- 20) Simpson, D. J et al. (1978). *Vet. Rec.* 102 91~92.